

〔倭訓栞前編三十三〕も、略○中 桃は燃實の義なるべし、緞をも、いろと云は、花に据たり、後拾遺

集に、みちよへてなりける物をなどてかはも、としもはた名づけ初けん、三千歳の故事は西王母より起る、八重桃、毛桃、姫桃などよめり○中 倭名抄陸奥の郡名に桃生をもむのふとよめり、さ

れば又もむの轉にや、實に細毛あり、揉て去べし、以黍雪桃の意にやともいへり○中 後撰に物いはばとはまし物を桃の花とよめるは、桃李不言下自成溪といへる故事によめり、三月三日に桃

花を用うるは本草に据也、須磨兵庫邊には家ことの軒に柳と桃を交へ挿り、桃の鬼を避る事は、神代紀に見えて本草にも、桃符桃楸を表出せり、

〔萬葉集七 譬喻歌〕寄木

向峯爾ムカツラニ立有桃タラモ、成哉等ナリナラズ、人曾耳言ヒトノミミコトヲ爲汝情勤サメキシナガコロコユ

〔拾遺和歌集七 物名〕も、

すけみ

心ざしふかき時にはそこのも、かつきいでぬるものにぞありける

〔鹽尻五十四〕一孔子家語に、果屬有六、而桃爲下、祭祀に不用といへり、不審、漢唐には桃を五果の一にして、ことに目出度ものとす、いかにして祭祀に用ひざる哉、夫桃は鬼を避るもの故、鬼神に薦めざるか、書して以て識者をまつ、

〔倭名類聚抄十七 桃奴〕本草云、桃人一名桃奴、和名毛々乃佐福

〔箋注倭名類聚抄九 果蟲具〕原書下品桃核條有桃鼻云、一名桃奴、按桃鼻是實著樹不落實中者、今俗謂木守即是、本草和名並舉桃核桃鼻一名桃奴、源君誤認以桃奴爲桃人一名非也、

〔採藥錄五 桃仁

種類尤多シ、一種野桃ト云者、俗ニ苦桃ト云、能ク熟タル時採リ收メ、地中ニ埋メ、肉ヲ腐リ盡シテ取出シ、洗淨シ、打碎キ仁ヲトリ、日乾スベシ、又土中ニ埋メ置キ、春ニ至テ掘出シ、日乾スレバ自ラ